

ヨハネの福音書 第1章 5節

「光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」

この季節になると街々の光は一段と輝き始める気がする。山里でも都会に負けまいと光の演出が行われる。その光に照らされて、大人たち、友人たち、子供たちの笑顔が映し出される。いよいよプレゼントの季節が到来する予感が光のなかで段々と色濃くなる。その期待のせい、人々の顔が一段と明るく輝く気がする。暗さ、闇の中で照らし出されるせいかもしれない。

この光の束はやがて季節が進むと段ボールに詰められて倉庫で一年の眠りにつく。光に照らし出された人たちは路上から消え、再び忙しい日常へと返る。光に照らし出された顔は一時の写真のようになる。時の経過とともに思い出となり、あの時の明るい笑顔は過ぎ去り、時折影をさし、闇が覆う、多忙な日常へと帰る。

そればかりか世界を覆うやみはあたかも世の終わりを告げるかのように猛威をふるう。病床に横たわる者に迫る闇があり、飢餓砂漠に押し寄せている病もある。そして、今なお続く戦争がもたらす命うばわれる闇がある。これらの闇に押しつぶされそうになり、それでもひかりを求めて生きる世界がある。すべての闇の根源である罪に打ち勝つ光が到来した。この光がやみの中輝く。やみは打ち負かされた。

2022年12月12日